

同僚教師同士のメンタリングにおける メンターの働きかけの提案

— 2名の社会科教師の授業観・授業構成の変容に着目して —

学籍番号 209329

氏名 山下 博暢

主指導教員 峯 明秀

1. 問題意識

筆者はこれまで5年間大阪府立高等学校の教諭として勤めてきた。だが、同僚社会科教師が2名しかおらず、先輩社会科教師もいなかったため、授業について相談する相手がいなかった。そのため、授業改善を自力で行ってきたので、教師一人の努力によって授業力を向上させ、成長していくことに限界を感じていた。

では、勤務校の中で同僚教師同士が協働で学び、より良い授業実践を行っていくためにはどのようにしたらよいのか。この課題を探求することで、現在勤務している高校での教師同士の学び合いの方法の提案やシステムの構築に寄与できるのではないか。そのような問題意識が、本教育実践研究の原点である。

2. 本研究の主題

本研究の目的は、同僚教師同士のメンタリングにおいて、メンティにどのような変容が起こるのかを実践的に明らかにすることである。そして、同僚教師同士のメンタリングにおいて、授業改善を支援するためのメンターの有効な働きかけを提案することである。

今津(2012)は各都道府県の提供する現職研修は、個別的な状況や問題に対応・解決する「能力」を鍛える研修が多く、教師が授業観や教育観などを磨き、「資質」を鍛える機会となっていないと指摘している。

では、現職教員が教科指導の能力だけでなく、授業観を練磨する方法は何か。三輪(2020)は教師の学びの中核は「実践と省察の往還」であるため教師の資質の向上の基本は「現場で学ぶ」ことであると述べている。また、浅田(2021)は教師の成長を左右するのは教師同士の発達支援関係であり、その教師の発達支援関係とはメンタリングであると述べている。それらを参考にすると、現職教員が学ぶ最適な方法は勤務校内での学び合いやメンタリングだと考えられる。

メンタリングの実践的な研究は増えてきている。ただ、先行研究には以下の2点の問題がある。1点目は、これまでのメンタリングの実践的な研究の大半が、研究者や熟練教師がメンターとなっている点である。専門的な知見を有するメンターと接点のない教師の方が多いため、これらの研究が勤務校内での学び合いに適用できない。2点目は、単元レベルの授業案や論文、授業計画書を読み、対話を行うだけで授業観の問い直しや授業実践の変化が起こるとは考えに

くい点である。

以上の2点の問題点は、メンターからの助言や研究者の理論に頼った学びとなり、現職教員が勤務校という「現場で学ぶ」ための最適な方法とは言い難く、「実践と省察の往還」が行われにくい状態であると言える。では、同僚教師同士でのメンタリングを行う際に、同僚だからこそ行うことができる方法とは何か、どうすれば同僚教師同士で授業観や授業実践をより良いものに変容できるようになるのだろうか。

3. 本研究の対象と方法

本研究では、2名の同僚社会科教師を対象として、以下の4段階でメンタリングを行う。

第1段階では、両教師の現状を分析するため、どのような授業をしたいか、どのような生徒を育てたいかという考えを聞き取るための対話を行う。第2段階では、筆者が実践した単元(5時間)を観察してもらい、どのような気づきがあり、今後どのような授業を行いたいかというテーマで対話を行う。第3段階では、第2段階での気づきを踏まえて、現段階での理想の授業を「実際にやってみる」という体験を行う。ただ、理想の授業をすぐ一人で行うことは難しいため、筆者と協働で授業を考えることとする。この体験を通して、どのような気づきがあり、今後どのような授業を行いたいかというテーマで対話を行う。第4段階では、第3段階での気づきを踏まえて、「メンティが一人で取り組む」という検証を行う。両教師に授業計画・授業実践を一人で取り組んでもらい、筆者は観察する。その後、どのような気づきがあり、今後どのような授業を行いたいか、メンタリングを通して、自分はどう変容したかというテーマで対話を行う。2名に共有して収集した対話データを主な分析対象とし、文字テキストとして解釈し、考察を加えた。そのうえで、授業に対する考えや認識がどのように変化したのかを主に時系列的な変化に注目した。

4. 本研究の意義と特質

本研究の意義と特質は、以下の2点にまとめることができる。

第一に、同僚教師同士のメンタリングにおけるメンティの変容を示したことである。これまでのメンティの成長に焦点を当てたメンタリング研究では、いずれも熟練教師や研究者がメンターとなっていた。そのため、校内における同僚教師同士のメンタリングにおいても汎用可能とは言い難かった。しかし、本研究において、同僚教師2名の変容を厚く記述したことで、メンティである同僚教師がいかに変容したかという実態を描き出すことができた。

第二に、同僚教師同士のメンタリングにおいて、授業改善を支援するためのメンターの有効な働きかけを提案できたことである。

本研究で明らかにしたメンターの有効な働きかけは、①メンティが持つ授業観とは異なる授業観の授業を観察もしくは実践し、生徒の変化を実際に見ること、②メンティが理想とする授業を行えるような足場架けをメンターが行い、理想の授業を体験させることの2点である。

この2つの方法は、必ずしも段階性のあるものではないと考える。したがって、メンティの抱える課題や問題意識からどの方法が良いかをメンターが考え、選択する必要がある。